



拙稿

四君子供養

中村俊定文庫

文庫 18

571

四君子供養
天明
元

陽
藏

かき

新子のあはれ

あはれに解きりし

夕のあやもて

ゆき人のあはれ

多摩屋士

あはれやあはれ

川を越して来た

徳家のあはれ

みよ氷うら

お



不韻

未海

かゝる家にはいふ言ふ

ぬき川とて

多解居士

かゝる家にはいふ言ふ

紹起

かくも聞けり歎くもたまた

不韻

山の井を松の憩ひに汲つて

鳥明

松の梅の葉は夢の夢

字不

さきくはに飼ふも尺をたれはのち

平礎

ゆきを凍しや翠簾の月の

泉之

さき雨の涙をくちけり角鹽

之尾

さき溜りあり柳橋のもや

西味

甲しにふくく鑑さるる中

江左

ひと甲あき子の舟を始し

望泉

折船子があはれ人の何れと

笠野之

おしやゝのさくら文車の文

長川

志れやうる雨降さく夕暮る

夢塔

堀井の窟子るのひたうく
 誰人にもあうりしりし妹の影
 玉の粉深きよにひくは他人
 ういの元もはゆれも月の老とて
 権しりゆとさ今とありし
 かきう空峰葉くはそさうし
 うるくもくくは啼きあひのう
 花見と去のもくくはうや詩や
 しくお館の傘形くりし

素風
 堀井
 玉簪
 蕩々
 陸州
 鳥羽
 柳深
 花道
 暮年

くらむる葉は冬の柳の枝
 日本紀の安は古を傳説とや
 香ふしに去年の浪雲のちりぬ
 道おんくの星をたけし
 向竿を扶けを入る木由近
 懐版巻のりしを相魚
 千燈つき小魚やうるひる潮
 櫻はくさる夢不のり南
 春の日のく流るをさす時と

眉尺
 林多
 暮年
 巴井
 魚足
 柳志
 瓜洲
 至涼
 夕輝

まのつゆのゆくに 簾の 咽つら
 味峰 挿の志を しゆく 燃るのよ
 月も 思ふしゆく 恨 休
 長束 心と 折るひし 掃屋 友のよ
 ぬちゆくしゆく 髪 六のふ
 勝いゆく 酒を 停止の 弱く あり
 ひゆく 流 底の 眉 折る 顔
 くら 心 折る 体ゆく 心の 那智 熊野
 子あ 母 くるゆく 折る 井 身 心

柳ゆく 中 折る 心ゆく 雲の 端
 あちの 心ゆく 志 折る 海
 ぬさ 心の 折る 志 心ゆく
 心ゆく 心ゆく 心 折る 心ゆく
 版 折る 心ゆく 心 折る 心ゆく
 心 折る 心ゆく 心 折る 心ゆく
 心ゆく 心ゆく 心 折る 心ゆく
 心ゆく 心ゆく 心 折る 心ゆく
 心ゆく 心ゆく 心 折る 心ゆく

市明 踏岸 眠碎 鳥夢 夷川 海直 多路 次程 雨什
 長川 瓦下 路古 春里 溪之 而洲 車全 翠鐘 翠草

ふふ硯の楳の春 あり体
柳の岸春加さるは法の入
少くは海氏のくさしと年
みまもるは憶さるは意のちのうま
竹ふると雪のふりのきうさる
あまきけのさすたるは之國哉
わらわさる急伝のきく力形る
さうさく化さるはまのまのま
常あさるは雨風の板

知二
古藤
喜江
徳を
意を
縁机
子解
東籟
知之

若くは代さるはまのま
はあさるは葉のまのまの松
あさるはくくは和のる年忌

春園
鳥見
可真

お

一河當田日出産松香

吉前書破

其世世入おのの意や時安うと
おし今中川をき回し一竹如鏡
の家ぬるし一ひきれぬ夏の風の意
えしとけき帳や一松もあつとまに
おめく書のかきとるさうさう更なる
りふ中やの若きまをふり風の書
ぬる家とあつとや松のしとまをえ

江都

向ふ之
竹泉
西和
江左
素風
泉燈
華系

今年うらや時きうらうし十二年
松さし岸に卯のうらまぬあまの
うらぬすよ老を楓よ峰あふるを
古き世をとや若き世の意
一さうしきうら楓の世の志きま
ふの鏡のあつとまを時き
ゆるるのあつとまを一ほとる
新も志きり十二年の松の家
つるもやうとあつとまの若きうら

川崎

子狸
時笑
杏林
松李
知之
竹舎
几面
棠江
龍堂

ありんさる橋のしゝか付くく
 ちとて付はさふにこそあし
 何れもなむあやうきやけは
 ちかきく外のをかきく
 碑のふまのつらふを
 常日御守積常地御を
 碑のちとてまをさく
 本やうきく
 めくく

作川
 二渠
 素
 大明
 烏
 深田
 深
 眠
 烏

谷のちとて十三回
 月や日やあつた
 山
 言
 那
 世
 ち
 り
 り

吹屋
 三井
 次
 鳥
 ト
 雨
 春
 一
 豊
 皓

高き山を物らしを碑にうつらうつら
 卯の山を物らしは山を物らしを物らし
 目さへしや卯の山を物らしを物らし
 うたを志の山を物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし
 人志の山を物らしを物らしを物らし
 十三年卯の山を物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし

遠山
 長川
 左光
 卯吹
 卯列
卯子
 卯丹
 卯孫
 鳥類
 一費

花散てあはれを物らしを物らし
 卯の山を物らしを物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし
 志の山を物らしを物らしを物らし

卯列
 卯向
 卯川
卯孫
 卯孫
 卯孫
 卯孫
 卯孫
 卯孫

多る醉亡時を十三回忘にんあまふすあらん
廻をすの也ん徳さるのこころ一鳴字初たりある
余をめて何うかきりあまふ徳思をたは先
ゆさずや合ら一見るものゆものには是て
も唯誰かうん見つう一く及繼の徳もま
とるもの
わが前にも構はまはれ
うさけまのあまふはうかきて後を忘あり
起るのまじき

おもひ那らふもの

ふまふまふあまふ

あまふ

香譜

能念したあふるものと古人のあまふ
さるさるいさくう年七年前あまふのあまふ思
子あう味る徳に思後のもるうと味と徳にうかき
はくさく思の徳と奉るのこころにたせのあまふ
名を思ふ人思指やまふ指針て思あまふ
あまふあはくさる子かま思思をまふあまふ
我うさうさうとわくさうあまふこころあまふ
少像遠命のさまふの無悔とわくさうあまふ
法日安祥林の味らにさうあまふ社まふこころ
一枝のさる一枝のさるを指て思あまふ

ねものさのふり

かうりりあまふ

鳥
九
詳

名録

四季混雑

山めらる好者まをやー曹

磯

江

花徑

招ししききししと若るる好

字拙

糸のつねやあつとまー方鉤紙牌

染年

姑風やと雁あつふ子まをまをく

巨舌

申つとまくと柳とまをの夕日る好

己禮

比くく暖やまをまをくちる好のさは

竹替之

石峰と隔子四五枚読ひりり

雪峰

おの花のまをまをくちる雨の後

雪香

風まをいま山まの志まをくちる好

まを

たまをまや一好りのまをまをくちる

あ禮

まをまをまをくちるまをくちる

こ暖

おのらるまをまをくちるまをくちる

まを

中くくはと終つとや今まをくちる

春川

まをのまをいままのまをくちる好

まを

まをくちるまをくちるまをくちる

羽子

大寺や物中ひくくまをくちる好

まを

夫り雨や志しき名なく梅うら
日の影やはくはに神の定意し
海の舟らうきさしをるる夜に
とま守のびとてききゆくしぬき
なまのねも然しゆきしゆき
田舎く集る下船の白ひや蓋の月
秋の船や傘をささく曇りぬ
きとこちや夜にみながく人ら
サ枯りくや語らうとくしるの光

紫橋
白文
又意
木堂
高松
可名
白紫
緑玉
豆提

おはせ連

船く江よ急うた安くは小春う船
岸さち一宿に寝見や夜の籠
月を舟中や氷嵐うき宿らうと
春の舟やのうらうとささく舟力や
志らおぬきて猶もくうきまきの雨
はやくしとるおかく小春をひき
け寺の夕暮うきと紅雲の
雪のうらうと一をのをゆりく船

東潮
暮山
時笑
笠倉
杏林
柳亭
古の廿
石南

和歌や世の中より新しき事
あはれもふ世に氣あらしむるを
人よりよき世に知目の雨あらし
一雨降て好まき層の東より水
眼もまたの鶴子胡蝶を飛せし
ゆきしとふ世のあらしの
ちかき移のあらしの
秋もよき世のあらしの
新しき世のあらしの

上野酒子祝

徳川

秋

泰舟

可成

水雨

東也

風也

雨也

あらし

新也

をたし人の世もあらしの事
大移りゆく世を移てゆく事
雨もよき世のあらしの
羽もよき世のあらしの
あらしのあらしの
あらしのあらしの
あらしのあらしの
あらしのあらしの
あらしのあらしの
あらしのあらしの
あらしのあらしの

全園

玉筥

羽平笠

笠後

白亀

雲後

小太

忠恕

細也

厚きくや雪をみしひくし
秋きりや露のそよぐらの夕日
燐ひくたや灰の白ひの二三日
法正の山の手はも花の華聖
秋の白き雲くまらぬに
花の白き雲くまらぬに
伐くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

厚奴
鳳尾
石衣
車産
石
紫柳
半端
仙芝
大壽

秋きくや雪をみしひくし
秋きりや露のそよぐらの夕日
燐ひくたや灰の白ひの二三日
法正の山の手はも花の華聖
秋の白き雲くまらぬに
花の白き雲くまらぬに
伐くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

八王子
徐風
一路
何誌
秋
市明
白羊
巴摺
路園
二園

石をさる蟬や門をきくうろく人権
後の舟をさるく扇をふかかえう船
山をさる舟をさる舟や舟の舟を
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟

東急 林多
坂田 板松
戸田 魚瑞
山崎 磐石
尾形 室多風
蓮田 山松
少松 山松
す松

舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟
舟をさる舟をさる舟の舟をさる舟

尾形 翠文
新井 軽車
山崎 林翠
山崎 復口
山崎 白明
山崎 化育
山崎 松系
山崎 新雪
山崎 諺風

此の草花に花うつる花をよき草花
牡丹の花をよき草花のよき花
若竹や梅の花をよき草花のよき
竹の花をよき草花のよき草花
一花のよき草花のよき草花
うらひ草のよき草花のよき草花
草花のよき草花のよき草花
草花のよき草花のよき草花

口よき
和名
若竹
牡丹
竹
十竹
草花
長石
山香
修石花竹

此の草花に花うつる花をよき草花
牡丹の花をよき草花のよき花
若竹や梅の花をよき草花のよき
竹の花をよき草花のよき草花
一花のよき草花のよき草花
うらひ草のよき草花のよき草花
草花のよき草花のよき草花
草花のよき草花のよき草花

口よき
和名
若竹
牡丹
竹
十竹
草花
長石
山香
修石花竹

新くしに板塀の中へて梅のこゝろ
 ありあはれ月白輝き入るる
 花をよみわすれた杉の白ひく影
 ぬきの入るはくはあはれ
 夕ぐれの中夜をぬくふ霖の幕
 埋火を以てあはれはあはれ
 こゝろ見ゆは竹のさやや春の雨
 亭の淵に猿田あはれはくはあはれ
 春の雨の中あはれはあはれ

相石西尾 鶴子園

甲斐守地巻 子来

北条 可於室

鶴子 五洲

廿 聖丹

星橋 能舟

喜井

古人の部

由緒のこゝろしにあはれをを線外

山子志村氏 圭摺

程多和蘇阿河橋の羊一ありては地を
 幸多子風流の礎の朽をー有はるるは鳴吟

秋ありや東あはれこゝろはあはれ

上野東屋 菊林

塔り名もあまの山所言のあはれ一我々を以て
 用とあはれ程多子風流を流す

月輝すこゝろはあはれ

野原松原 吳扇

法号つゝあまの山所言のあはれ一我々を以て
 杖を以て風流を流す

あはれを急やあはれを急やあはれ

五洲鶴子 仙舟

けし風流を指の樂しこゝろを向ふ
 かりしに思ふ如のあはれ

見よしと梅子咲く山路の形

江村

雪のつらや御階をまきく梅のよは

明くこの石をきく石の形はあはれ

石のよきを御門遠く一帯をまき

流あはれ川ありはくく寂中一く形

夕雲をちやまはくくあつて土倉ふ

信濃の山にありり梅の葉

吹やしと雪の形や雪の形

をまきくやまはくく山はあはれ

小解

山をまき梅の形の形

神原や新子山とふ改の山を

代へら山原や霜衣の形の形

もつめ山の山をまきひやたの山

山をまき山の中に山をまき

山をまき山をまき山をまき

山をまき山をまき山をまき

山をまき山をまき山をまき

山をまき山をまき山をまき

知え

正統編子
蕩々

昔もあはれをよそへししとわ世に
世の中のをたれをわらへしと
春の夜を海もゆきしを
足はるをいふやとわの
いふはるをいふやとわの
世の中のをたれをわらへしと
ちよとてを等閑あはれしと
いふはるをいふやとわの
いふはるをいふやとわの

石井
柳原

あはれをいふやとわの
春の夜を海もゆきしを
足はるをいふやとわの
いふはるをいふやとわの
世の中のをたれをわらへしと
ちよとてを等閑あはれしと
いふはるをいふやとわの
いふはるをいふやとわの

玉目
鳥羽

とるににりてはるき家境の形

小笠原我堅

羽尺

あつさのや死も學ぶぬれ果の香

世の事は何ぞの筆の長きしり

消えあはるる櫓火の煙の船

上野田

巴井

大弟や居んしそとそとそと椿

行者の貝売んしそとそとそと

くさくさの屋上の杉子そとそと

かきくも日つきち根のうささう船

春の風はく終るるははははは

日舞の志

天年

夏の日やふくたぬあけのあけしそと

志くそと白くおはるははははは

植のまやねを斜にまうれしそと

かきくもやそとそとそとそと

日舞

亀足

櫓の煙や白ふや 空をぬはる

秋のあや見はるにけはははの雲

たうしそとそとそとの迹は枯燈は

まうまうあそとの終るはははは

日連

柳志

噫しはやすりの舟の入りり

三日月や志はしめ影も妹のそら

山原の山田にあらそい沙の船

山原子温良のつしを足舟り

夕とちの安とや喜田に舟うさほ

おしあつし蓮のあふふ盆の棚

櫛あけやあき雲しおのね

山原や地原りをもふあき雲

川抄にぬきくまはしや角力取

草の露や足踏し僧のぬいふあ

山原形

瓜削

上毛沼田

賦詠

一志のれ神るのほくまのそら

日や曇るくちと峰のめさ雲のそ

そそくもの空都さるは沙地う船

ぬ人の極あつしりり詠詠詠

空と雲のつらくにひめくそよられ

なまけり雲あつしそらそら

大慶のくちやあつし子親

舞く雲を林のあきあつしそら

芥の草のまきあつしそら

日三時

雨竹

山原形

二

猫の急はうろくして賦は美意は

川口井原
多路

ふくつぬや鐘をきき里を罷あり

若もや花子くくぬの人まても

志を高くや居よの格に足るあれと

拙作のく人も春を待たぬを

川口井原
海陸

川勢や水きうんをくた居の婦

幼房や洲崎に雲に人あーり

物くく時、雨くく雲はの山に山

柳くくくも昔はと見え

遠野井
長川

まらるる居りくくちの古はを彫く

朝息の喉く時をたそふたよりぬ

風のきくくくくくくくくく

為れちんあしの草やや梅くち居

川所
石列

麦の中菊やきけぬぬきくくく

ぬき梅やありあ梅の古の夏

まらるるくくく代きくくくく

鳥さしし遠く山はくくくくく

川口井原
多路

倒もくくく羽織ぬぬぬぬ

世の如く叶あまを再一ありし
あかりしや新の蘇の明もあま
人をきりし世のあはれちり明
あまのきりし世のあはれちり明
あまのきりし世のあはれちり明
あまのきりし世のあはれちり明
あまのきりし世のあはれちり明

みまの
鳥

お

俳諧を好む

正則のまじりて新始を
志高をいふや

坊中つれは技を侍てやうつ海あはれは並又坊長川の如く
うさぎのあまの娘は並又うさぎの身は舟子のまじりて舟の
一書をたはしりてやうたをうさぎの身は舟子のまじりて舟の
室の舟子の白を煉て流の泉は文字を流ふは必能の室子
あまの娘はうさぎの身は舟子のまじりて舟の泉は文字を流ふは必能の室子
つれは技を侍てやうつ海あはれは並又坊長川の如く
うさぎのあまの娘は並又うさぎの身は舟子のまじりて舟の
一書をたはしりてやうたをうさぎの身は舟子のまじりて舟の
室の舟子の白を煉て流の泉は文字を流ふは必能の室子
あまの娘はうさぎの身は舟子のまじりて舟の泉は文字を流ふは必能の室子
つれは技を侍てやうつ海あはれは並又坊長川の如く
うさぎのあまの娘は並又うさぎの身は舟子のまじりて舟の
一書をたはしりてやうたをうさぎの身は舟子のまじりて舟の
室の舟子の白を煉て流の泉は文字を流ふは必能の室子
あまの娘はうさぎの身は舟子のまじりて舟の泉は文字を流ふは必能の室子

くうぶく思はくくた疎をききしは事ありは
島平公を治くちるを跡あり

浪花集注巻風話

一少世少き難陀あり士生山急流庵に在せし事あり
此のやゆもや郡山小つて山麓あり社中にもありて
日を過しつて世もくもく折れぬ文由るゆにこの難陀の
まゝ和をちりてあやう家以老を峰とて志ありて寂果
堂はくちる難陀正存る明吐風里飯法沙生右にあり
本坊とて淨春も土瓶子一破のあまき温菜糖一節を流して
心をとつちる難陀黄納也今他府而山宗祥有現任子とて淨春
表号也
と聖の産にしと祖孫の神足土芳子り肌着たり師と
其のよみ同くして淨加え坊御ありて夜燈一法冬扇一巻と
以上集を撰り終る事蹟を来くま

一書を収めて之を以て抄敬として之を看せ是や枕書
残といはれぬ常以て書子納めて之を餘家の人にして
後子書也 宿禰書納師賦後子書子納にひくく時三輝の書子納
神子書子納子書子納子書子納の長抑る也
いふ余命終るも師に由つてと師に由つて護るる我命却て
是れといはれぬやせぬ法抄を之に人にして久遠の書
を以てしむるあり七部集の吟人し解せざるありや
ありしと書ふ所を向ふ師のささくありぬありの書集あり
赤坂常思及拜し枕書残の風流中にて七部の吟人を其世に
之度の後ありとあり赤坂柳若士の言ひて引ん人を根拠に
しるしと書むといふ句の夫をいひてる難言をいひしむ
賦しむるといふとありと書ふへしれと書ひしむる先七部集
を以てしむるといふと又七部集をいひしむる書人又稱也

又書集の言を以てしむる書其意を澤は安ん工との書を
画しむるといふとありと書ひしむる書其意を澤は安ん工との書を
神法集を以て法花に將しむるありと書ひしむる書其意を澤は安ん工との書を
加ふといふも流るるありと書ひしむる書其意を澤は安ん工との書を
書子書ひしむる書其意を澤は安ん工との書を
永正の尺城石山法華居士宗澄連舟の筆は集いありと書ひしむる書
は集を編りしむる書其意を澤は安ん工との書を
法にて細川玄旨法華の門人相承貞徳 法華居士宗澄連舟の筆は集いありと書ひしむる書
永二年十月又日法陽妙満寺本又坊にありて神めて法華の文書
を以てしむる書其意を澤は安ん工との書を
宗周一派の流るる書其意を澤は安ん工との書を
延慶了和の流るる書其意を澤は安ん工との書を

むらさきのちび白毎にうたふ一とありて書とあり

○風多し一奇也と見ゆふ一そのによきて海を渡る

風跡といふや かき後 別名とて かき 一 かき 一 かき 一

二書版を鄭云いして拾揚一奉本家とて かき 一 かき 一

西施の金飲のなり かき 一 かき 一 かき 一

一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

少くもよくすて性也との世し かき 一 かき 一 かき 一

蘇の所説に かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

○賦 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

そり かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

か かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

山 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

○ かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

奇 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

を かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

本 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

あ かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

く かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

み かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

を かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

○ かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

ち かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

を かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一 かき 一

十三

ノ

中村俊定文庫

